

称号及び氏名 博士(看護学) 田中 陽子

学位授与の日付 平成29年3月31日

論文名 就学前の子どもを育てる母親の被養育体験認識尺度の開発

論文審査委員 主査 上野 昌江  
副査 田嶋 長子  
副査 檜木野 裕美  
副査 大川 聡子

## 論文内容の要旨

【目的】本研究は、就学前の子どもを育てる母親を対象に、親子の相互作用が重要である幼少期の愛着経験に焦点をあて、被養育体験認識尺度の開発を目的とした。

【方法】尺度の作成は以下の3段階にて進めた。

1. 尺度原案の作成(予備研究1) : 就学前の子どもを育てる母親の幼少期の被養育体験についての主観的認識を明らかにするために、半構成的面接を実施し、質的帰納的に分析した(調査期間2014年3月~8月)。母親の平均年齢は $35.6 \pm 4.5$ 歳、母親の被養育体験における主観的認識は90コード、27サブカテゴリー、9カテゴリーが導かれた。概念分析で得られた「愛着対象の存在」、「親との相互作用の経験」、「親との近接可能性」、「親との情緒利用可能性」を下位概念に設定し、母親面接から導き出された25項目と文献からの知見の40項目を精錬し、55項目の尺度原案を作成した。

2. 尺度原案の内容妥当性・表面妥当性の検討(予備研究2) : 親子関係の支援に精通している専門家11名(小児看護学および公衆衛生看護学で母子保健を研究領域とする教育・研究者3名、母子保健活動を行っている実務経験5年以上の保健師4名、親子関係の支援や相談業務を行っている心理職2名、保育士2名)を対象に、自記式質問紙調査を行った(調査期間は2015年1月~3月)。内容妥当性は、尺度原案と下位概念の内容について関連し適切か4段階で評価し、内容妥当性指数(Content validity Index : I-CVI) 0.8未満を除外基準とした。表面妥当性は、項目の過不足や表現について意見を集約し検討した。その結果55項目中、I-CVIより13項目と意味内容が類似する6項目計19項目を除外、専門家の意見から11項目を追加修正し、47項目を尺度原案修正案とした。

3. 尺度の信頼性・妥当性の検討(本研究) : 便宜的に抽出した13施設で、就学前の子どもを育てる母親1119名(保育所通園児の保護者914名、子育て支援事業等の参加者205名)

を対象に尺度原案修正案について自記式質問紙調査を行った（調査期間は2015年7月～12月）。再テストは、6施設401名を対象に1回目の調査の3週間後に2回目の質問紙を配布し施設に設置した回収箱で回収した（調査期間は2015年7月～12月）。調査内容は、個人属性、尺度原案修正案、基準関連妥当性の外部基準尺度として青年期の親との愛着について想起し測定する「Inventory of Parent Attachment（以下IPA）、母親の対人関係について愛着スタイルを測定する「成人版愛着スタイル尺度」、子育て支援の必要性について子育ておよび家庭への適応を測定する「Parenting and family adjustment Scale（以下PAFAS）」、母親のパーソナリティを測定する「自尊感情尺度」である。分析方法は、尺度原案修正案項目の統計的検討として、回答欠損率、天井効果、フロア効果、GP分析、通過率、IR相関、探索的因子分析は最尤法プロマックス回転を行った。尺度の信頼性は、Cronbach's  $\alpha$  係数から内的一貫性、再テスト法による級内相関係数（Intra-class correlation coefficient：ICC）から安定性を検討した。尺度の妥当性は、外部基準尺度の下位尺度との相関から基準関連妥当性、確認的因子分析から構成概念妥当性を検討した。

予備研究1、2、本研究はすべて大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号25-65, 26-54, 27-22）。

**【結果】** 1回目の調査の回答は767名（回答率68.5%）であり、有効回答639名（有効回答率57.1%）を分析対象とした。再テストは231名（回答率57.1%）から回答があり、有効回答は206名（有効回答率51.4%）であった。母親の平均年齢は34.5±5.0歳であった。尺度原案修正案47項目の統計的分析より、天井効果4項目、通過率2項目、IR相関2項目計8項目を除外、探索的因子分析により12項目を除外した、27項目3下位尺度が抽出された。3下位尺度は**【親子のふれあい】**、**【情緒的なつながり】**、**【親の印象】**と命名した（累積寄与率58.2%）。信頼性の検討の結果、本尺度のCronbach's  $\alpha$  係数は、**【親子のふれあい】** 0.94、**【情緒的なつながり】** 0.93、**【親の印象】** 0.83、全体0.83であった。ICCは、**【親子のふれあい】** 0.7、**【情緒的なつながり】** 0.8、**【親の印象】** 0.8、全体0.8であった。妥当性の検討の結果、本尺度の各下位尺度は、外部基準下位尺度のIPAコミュニケーション・信頼、成人版愛着スタイル尺度安定型、自尊感情尺度と正の有意な相関を認めた。また、IPA疎外、成人版愛着スタイル尺度不安型・回避型、PAFASとは負の有意な相関を認めた。確認的因子分析により、探索的因子分析で抽出された27項目3下位尺度の仮説モデルの適合度指標CFI=0.904、RMSEA=0.079が確認された。

**【考察】** 本研究で開発した被養育体験認識尺度27項目3下位尺度は、内的一貫性と安定性、基準関連妥当性と構成概念妥当性の結果から、一定の信頼性、妥当性を備えた尺度であることを確認した。地域看護実践の場において、保健師が子どもへの関わりが気になる母親を支援する際にこの尺度を活用し、親自身の被養育体験を一緒に振り返り、親への理解を深め、親の体験や気持ちに添った支援を行っていく糸口になると考える。また、親子関係を育むという視点で支援を行っていく際のアセスメントツールとしての一定の意義を有す

ることが期待される。

キーワード：被養育体験、愛着経験、世代間伝達、母子保健、尺度開発

## 学位論文審査結果の要旨

母子保健活動においては、子どもへのかかわりが気になる親への支援が重要である。そのためには、親自身の生育歴や被養育体験を理解することが必要であるが、現状の活動においてそれらを把握するための方法が開発されているとはいえ、本研究のテーマは学術的に重要である。本研究は、就学前の子どもを育てる母親自身の被養育体験の主観的認識を明らかにし、それに基づき、被養育体験認識尺度を作成することを目的とした独創性の高い研究である。研究プロセスは、インタビュー調査、文献検討に基づく55項目の尺度原案の作成、尺度原案の内容妥当性、表面妥当性を検討し、47項目の尺度原案修正案の作成、修正案の統計的検討、尺度項目の抽出、信頼性・妥当性の検討を行い、最終的に27項目の尺度の作成に至っている。尺度の信頼性・妥当性の検討のために、便宜的に抽出した13施設で就学前の子どもを育てる母親1119名に無記名自記式アンケート、再テストを6施設401名に実施している。調査内容は、属性、尺度原案修正案、基準関連妥当性の外部基準尺度として、IPA、成人版愛着スタイル尺度、子育て支援の必要性を測定するPAFAS、自尊感情尺度であり、尺度開発の手順に基づいた研究方法が用いられている。結果は、すべての項目に回答があった639名（有効回答率57.1%）、再テストは206名（有効回答率51.4%）を分析対象とし、母親の平均年齢は $34.5 \pm 5.0$ 歳であった。尺度原案47項目のうち統計的分析により27項目3下位尺度を抽出し、それらを【親子のふれあい】、【情緒的なつながり】、【親の印象】と命名している。本尺度のCronbach's  $\alpha$ 係数は、0.83、ICCは、0.8、各下位尺度は、外部基準下位尺度と有意な相関を認め、確認的因子分析による構成概念妥当性も確認し、一定の信頼性、妥当性を備えた尺度である。地域看護実践の場において、保健師が子どもへの関わりが気になる母親を支援する際にこの尺度を活用し、親子関係を育むという視点で支援を行っていく際のアセスメントツールとしての意義を有し、看護学の発展に寄与するものであると考える。

以上のことから、本研究は博士論文としての価値を有し、博士（看護学）の学位の授与に値するものと判断した。